これは何でしょう

答えについての思い出などもお待ちしています。

◪しめきり　3月13日㈮必着
◪あて先　〒783-8501　南国市大埔甲二三〇一　南国市企画課親子クイズ係
◪賞品　正解者の中から抽選で5人の人に図書券を進呈
◎第309回親子クイズの答えは、マンリョウでした。

第309回当選者発表（敬称略）
（応募総数11通）

沢本　貴良（緑ケ丘）
隅田　奈美（下野田）
小松　美智（比江）
浜田　寿和（明見）
田岡　利明（大埔甲）

思い出がいっぱい

◆野市の実家に咲いているのを思い出しました。（小松　美智）
◆家の裏山にたくさん咲いて大変美しい。花瓶にさしたいけど、何だかもったいなくてつい切らない。（吉本　恵美）
◆マンリョウとセンリョウと迷いましたが、冬には南天とともに赤くきれいです。植えかえがなかなか難しいようです。（浜田　寿和）
◆正月に玄所へセンリョウとマンリョウの鉢植えを持っていったらたいそう喜ばれ、うれしかった。（篠原　正郎）
◆子どものころ、友だちと実を取り、小川へほりこみ遊んだことでした。（棚野きよ子）
◆うちの庭に、おじいちゃんの植えたマンリョウやセンリョウがあります。時々ままごとのおかずになります。（野口絵梨子）

岡豊町中島
竹内　稚賀

広場

平成9年度の『土佐の匠（たくみ）』に戸梶春喜さん（稲生）が認定される

伝統技能の継承を親子二人三脚で

技能を大切にする社会を実現する目的で、県が実施している「土佐の匠」に稲生の戸梶春喜さん（四十九歳）が認定されました。優れた伝統技能や熟練技能の継承者として数々のハードルをクリアして認定されたもので、南国市民としては初めての認定となります。

重光の屋号で三代目となる戸梶さんに、高校卒業後、父親重喜さんとともに家業に専念しましたが、数年後には、重喜さんが他界。二十代で独り立ちし現在に至っています。

製造している青ハガネを使用してそば包丁や鯨の解体用包丁、洋食料理用の包丁など大小さまざまな両刃包丁を製造しています。

全国的にも数県しかない伝統打ち刃物の製造産地の後継技術者としてさらに技術を磨いていきたいと語る戸梶さんのかたわらでは、長男の光春さんが父親の跡を引き継ぐとの決意も強く、目を輝かせていました。

独立直後から直販店でお客さんから直接意見や苦情を聞くことなどで、技術の向上に努力してきたそうです。

加工技術が北較的難しいとされ

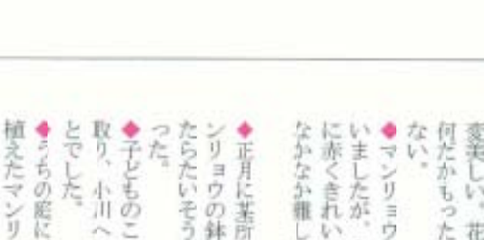
県外の大学で学んでいた光春さんを、どこかへ勤めにでもでるのだろうと思っていたところ、思いがけず「家業を継ぎたい」との申し入れがあったそうで、「あっそー」とさりげなく許可したけれど「本当にうれしかった…」とこの時ばかりは、優しい父親の顔で話していました。

四代目に技能のすべてが伝承されるころ、戸梶家の伝統技能は、さらに充実の季節を迎えることでしょう。

みんなの広場

地域交流スペース 三月一日オープン

特別養護老人ホーム『陽だまりの里』に


地域交流スペース

一月十三日に竣成した『陽だまりの里』（岡豊町中島）。この施設内に、地域の人々に喜びとふれあいを提供する場として設けられた『地域交流スペース』が、いよいよオープンします。

この専用スペースでは、囲碁・将棋・手芸・陶芸・ゲートボールなどの各種教室に参加していただいたり、地域の老人クラブや婦人会にも開放されますので、希望者はふるさと自然村（☎㊿0888）まで、ご予約ください。

また、オープン前の一月三十日には、ロシア出身のピアニストのマリアン・ビブカさんと高知市出身のバイオリニストの宮内康恵さんを招いて演奏会が開かれました。

二人は、入所のお年寄りや演奏会に招かれた岡豊小学校児童ら約百二十人を前に、熱のこもった約十曲を披露しました。

短歌

渺々の海の面青くかがやきて
入江を深く潮の満つるも
大埔乙　中田　憲秀

山びこのこだます里に粉雪の
殊に凍てつく八十の身にこそ
恒生　戸梶　政子

常に無き今の周りにまれに見る
優しさ溢れる人のおりしを
十市　細川　須磨

俳句

雨傘窄して木々の芽ぐみそめ
甘枝　二宮　弘代

若者の強き一声寒稽古
立田　佐竹　晃夫

鳥曇り何もせぬまま一日過ぐ
物部　久竹　豊美

猫柳眠らみ育つ川瀬哉
植野　原　忠男

手をたたき呼べば鴨来る寒の池
緑ケ丘　細美　寿亀

川柳

携帯を脇に公衆電話かけ
あんなにはなりたくないという年となり
十市　八松　久幸